

巻 頭 言

日本数学会前理事・東京都立大学理学研究科
徳永 浩雄

26 巻 1 号の矢崎さんの書評記事に「推し」として登場した中谷宇吉郎、寺田寅彦は筆者も愛読者の一人である。中谷宇吉郎は寺田寅彦の弟子であり、師と同様、数多くの随筆を残した。その中に折に触れ繰り返し読んで「線香の火」という随筆がある。そこには寺田寅彦が、「線香の火を消さないように」という言葉をよく使ったとある。学生が卒業して地方の学校へ赴任するような際に、暇乞いに来た学生に次のように諭したという：

「地方の学校へ行くと、研究の設備などは、もちろん少いだろう。研究費だってほとんどないだろうが、その気さえあれば、研究は出来るものですよ。設備や金がなくても出来る研究というものも、ありますよ。一番いけないのは、研究を中絶することなんだ。何でもいからとにかく手を着けて、研究を続けることが大切です。一度線香の火を消したら駄目ですよ。」

そして、中谷宇吉郎は次のように続けている：

「研究者として成熟した人は、線香の火を消さなかった人である。科学、たとえば物理学のような学問をやっても、皆が研究者になる必要はない。しかし科学をやった以上は、やはり研究者となるのが本筋であって、他の方面はいわば傍系である。もちろん教育は非常に大切であり、また科学行政のような仕事も、国家的見地から見れば、区々たる研究などよりも、もっと重要である。しかしそれにもかかわらず、本筋は何かと聞かれば、やはり科学者の任務は研究にある。ということは、現在ばかりでなく、将来を含めても、言い得ることのように思われる。」

現在の日本の理学部、その中でも数学・数理科学に関わる学科の卒業生の状況を考慮すると、この話をそのまま当てはめるわけにはいかないように思う。ただし、博士後期課程を修了した人はもちろん学部や博士前期課程を修了し、様々な職場で研究開発に携わっている場合にはやはり「線香の火」を消さないことは重要ではないかと思われる。

筆者が職を得た頃は、数学は「設備や金がなくても出来る研究」の代表格であった。初任地の高知大学は、助手という駆け出しの研究者を大切に扱ってくれるところで、研究する時間には恵まれていたし、また、最新の journal をはじめとする文献も取り揃えられていた。とはいうものの、地理的な不便さは、如何ともし難いものがあつた。就職する半年前に瀬戸大橋が開通し、連絡船に乗り換えることなく岡山から高知に行けるようになっていたとはいえ、インターネットはまだ存在しておらず、質問したいことができたときは、手紙を書く、場合によっては電話、最新の手段が fax による筆談、という環境であった。Eメール、さらに、昨年あたりからは Zoom をはじめとするオンラインツールで、離れた場所にいるもの同志でもかなり込み入った議論ができるようになった現在からは隔世の感がある。何か聞いて欲しい話ができ、自費で賄っても出掛けて行きたいというとき、それ

が可能となる自由な時間があつたおかげで自分は「線香の火」を消さずに済んだように思う。若い人を **encourage** してくれる空気に随分と助けられた。

数学の研究は「設備や金がなくてもできる」という見方は、設備や試薬が必要な実験を中心とする分野と比較すれば今も正しいかもしれない。しかしながら、「雑誌が購読できなくなったのに続いて、**MathSciNet** などのデータベースも契約を切った」、「科研費が取れないと、研究費はほとんどない」という話を聞くにつけ、やはり、最低限のお金がないと、研究をつづけていくのは難しいなあと感じている。さらに、「人事が凍結されて、退職者が出ても補充されない」「その結果、担当する授業のコマ数は増加するばかりで、研究する時間は減る一方」という、ここ最近の定番の話となっているのを聞くにつけ、世の中の流れは「線香の火を消さないようにする」努力を **discourage** する方向に向かっているような気がしてならない。地味なテーマで細々と研究をつづけている身としてはいっそうその感が強い。

こうした状況になってくると、春秋に開催される学会の意味はいろんな意味で重要になってくるように思われる。学会における一般講演は 10 分から 15 分のもので多く、様々な研究集会での講演時間に比較すると短い。細かな話ができないのでどうもと思う人も多いだろう。しかし、一般講演の申し込みは全ての会員に開かれている。研究集会となると、あまり研究費が潤沢でない分野ではそれほど大掛かりなものではないし、また、依頼講演が中心という研究集会もまだ多いので機会は限られる。自ら「火を消さないよう」に頑張つて成果を出してもそれを聞いてもらえる機会が巡ってこないこともある。春秋の学会はそうしたとき支えになるし、筆者が駆け出しの頃はそうであった。さらに、普段話すことのない、より広い分野の人にも話を聞いてもらえるチャンスにもなる。実際、研究集会の世話人をするような立場になってみると、学会の一般講演の講演者の中に候補を探すこともあつた。このような人は他にいるだろうから、講演者にとってみると思つても見ない反応もあり得るのである。

筆者は、雑誌「数学」の編集業務から勘定するとほぼ 10 年間、春秋の学会を中心とする数学会の裏方業務に携わつた。そして、多くの業務が様々な会員の無償の働きによって運営されていることを知つた。会費を納入していることを考えると、「無償の働き」以上のものであろう。学会の運営業務は中谷宇吉郎の言葉を借りると、「傍系」であり「本筋」では無いかもしれない。しかしながら発表の機会は「線香の火」を消さなくても済むよう **encourage** する場としては、特に若い人たちにとっては、なくてはならないものである。

学会の業務を頼まれた場合、できれば断りたい、サービスを受ける側に徹したいと思つてしまうのは人情である。会費を払つて会員の身分を得ているのであるからそれも当然かもしれない。しかし、数学会は「同好の士」の集まりとはいえ、法人格を持っている以上、法律に則つて運営して行かねばならない組織である。それをせず何かあれば、ツケは次世代に回つてしまう。若い人たちが「線香の火」を消さないで済むよう、数学会から何か依頼があつたおりには、どうか断らずに引き受けて頂きたい、そして協力をお願いしたいと切に望む次第である。